

海外武者修行のすすめとひとり旅の体験（2）

近藤 節夫

6. 加藤隼戦闘隊ビルマ巡拝団企画のいきさつ

若い頃実践した二つの海外武者修行から私は、旅の技術、ツアー企画上のアイデア、効率的なセールス手法等、仕事上のヒントや、旅行業の本質等を実践的に学んだ。その具体的な形となったひとつの例を「加藤隼戦闘隊ビルマ巡拝団」の企画から実施に至る経緯を辿りながら記してみたい。

1971年（昭和46年）秋、その2年前に旅行業界へ転じた私は、ビルマ（現ミャンマー）への戦友会による慰霊巡拝団の企画の可能性と実施方法を探るために上司を説得してひとりビルマの下見旅行へ飛び立った。丁度その半年前、大東亜戦争中勇名を馳せたあの「加藤隼戦闘隊（飛行第64戦隊）」戦友会の幹事であるNさんから加藤部隊ゆかりのビルマで亡き戦友の英霊を弔うための戦跡巡拝団を企画して欲しいと強く要請された。

当時海外旅行業へ乗り出して間もない会社にとっては、大きな使命感のあるプロジェクトであり、ロマンとやりがいの伴う魅力的な企画ではあったが、気宇壮大なプランであり最初にNさんから話を聞いたときは、ビルマという閉鎖的なお国柄といい、昔の兵隊さんが集っては思い出話に耽る戦友会のセンチメンタルなイメージといい、当時の私には分らないことだらけではっきり言って実現の確信は持てなかった。ゼロから企画を具体化するには以下に記すように難題が多すぎた。

当時のビルマは、

- 1)ビルマ式社会主義と称して孤高の鎖国的外交状態にあった。
- 2)極端な情報不足であった（ガイドブック、パンフレット類は一切なく、精々大野徹著「知られざるビルマ」というお堅い参考文献がある程度であった）。
- 3)僅かの戦没者慰霊巡拝団を除き、日本からの観光団は皆無だった。
- 4)国内の観光インフラが全く未整備だった（下見中にビルマ全国で僅か3軒ほどのホテルを除くと観光施設のハード面は最悪、当てにならないフライトスケジュール、寒くて眠れない夜行列車、年代ものでエアコンなしのバス、地方の劣悪なトイレ事情等を知り愕然とした）。
- 5)国営のビルマ航空（UBA）内に旅行相談所（TIS）が設置されている程度で、まともな外人旅行を取り扱える旅行エージェントはなかった。
- 6)サービスの対価、ビルマの物価に比較して手配料金がべらぼうに高かった。
等々

しかし、顧客からは是非企画を立てて欲しいと熱心に依頼された以上依頼主の希望を叶えてあげるのが旅行業者としての責務であり、やりがいである。幸い入国査証の取得には何の問題もないことが分かり、おっとり刀で引き受けることにした。

7. ビルマへの下見旅行

永年に亘り加藤隼戦闘隊戦友会の幹事を務めているNさんは、軍隊、日中戦争、南方作戦、隼戦闘隊戦史、戦友会組織、戦友の経歴と人脈等について何も知らない私に熱心に教えてくれ、他の戦友会にも連れて行っては多くの旧陸軍の軍人さんを紹介してくれた。その間にビルマという国についてどうして自分たちがこれほど拘るのか、ビルマの人たちの親切心、篤信的な国民性、我慢強い忍耐力、穏やかな包容力、親日的な感情等々に触れながら、彼らが青春時代に若い生命を燃焼させた苦難の中にあって僅かに生きる喜びを抱くことが出来たのもビルマの人たちとの心温まる交流があったからこそであると話された。いま一度あの青春時代のよすがに触れてみたい、またもう一度ビルマ人の優しい心情に触れてみたい、戦友を想う気持と同時に戦友会の人たちは、みな積みもった気持を昂揚させていた。私も次第にその純粋な気持に心を動かされ、挙句には感動の気持すら憶えた。

幾度となく話を聞いている内に私もビルマという国のカリスマ的な魅力に取り付かれ戦友会の人たちの気持に惹きこまれて行った。しかし、一旦引き受けはしたが冷静に立ち返ると社の内外にビルマ旅行の具体的な企画について相談を持ちかける仲間もなく、当面は戦友会の重い責任を背負って何から何まで自分ひとりで考え、主体的に実行する覚悟が必要だった。取りあえずマスタープランを考えてみたが、ビルマという国情がはっきり分らないだけに具体的な企画・実施案は現地の臨場感に触れ、皮膚感覚でフレームワーク作りをやるしか術はないように思えた。どう考えても日本にはビルマのイメージが湧いて来なかった。良い企画を作り上げるためにはいままでの経験から生の現地を見なければダメだと思った。下見旅行に先立って元外交官である学生時代の友人の父上にお会いして、この企画の主旨と私の企画に対する考え方を聞いていただき、アドバイスをお願いした。幸い私の考えと立場をよく理解していただき、逆に父上には力強く励まされ、親しい間柄という当時のビルマ駐在鈴木孝特命全権大使に宛てて丁重な紹介状を書いて下さった。

8. 巡拝団企画上の手配交渉

ラングーン（現ヤンゴン）の日本大使館では鈴木大使からビルマ国内を旅行するうえに必要な得難いサジェスチョンをいただき、更に貴重な便宜も図っていただいた。鈴木大使はその場でビルマ航空の運航局長を紹介してくれ、その局長のとりなしで直ちに TIS と企画内容について具体的な打ち合わせに入ることが出来た。

企画上最大のハードルは、ビルマ政府が軍政に近い治世下で航空隊の巡拝団が彼らの望

むとおりに、果たして軍管理の敷地内へ容易に入れてもらえるだろうかということであった。加藤部隊は帝国陸軍といっても陸軍航空隊であり、訪緬する以上どうしても戦時中使用した飛行場周辺での英霊に対する慰霊祭事とその飛行場の離着陸に強い思い込みとこだわりを抱いていることだった。出発前にNさんからいくつかの希望を聞いていたが、そのひとつは出来れば激戦地メイクテラ（現地語ではメッチーラ）の旧飛行場と往時の駐屯基地トウングー飛行場を訪れられるように話をつけて欲しいということであった。

メイクテラは、美しいメイクテラ湖に臨む中部ビルマの明るい街で、戦時中は日本軍も駐屯し、日本陸軍にとっても軍事上要衝の地であった。土地の人々も日本と日本人に対して特別の郷愁と親近感を抱いているように感じられた。なだらかな丘の上で戦われた日本軍と英軍との激しい攻防戦は今も語り草になっている。ここの旧飛行場を訪れ慰霊祭を執り行いたいというのが、加藤部隊戦友の共通の願いであった。しかし、ビルマ国内の他の中堅都市同様に市内には宿泊出来るようなホテルは一軒も見当たらない。私は宿泊したマンダレーのホテルでジープを雇いガイドも連れずに片道3時間余りをかけてメイクテラへ行ってみた。入手した情報ではメイクテラの日本軍が使用していた旧飛行場は、いまビルマ空軍の練習場として使用されているということであったが、私が訪れたときビルマ空軍機は一機も駐機していなかった。滑走路脇には戦時中日本軍が格納庫として使用した土造りの「掩体壕（えんたいごう）」が荒れるがままに残されていた。その旧飛行場には土を堅く固めた1本の滑走路があったが、街の人々に聞いてみるといつもは兵士も駐留せず時折飛行機が飛来してくるという程度の小さな飛行場でしかなかった。メイクテラは普通の地図上では中々見つけにくいだが、実際にこの土地に来てみると街の規模としてはかなり大きく、動き回っている間に徐々に街の輪郭と雰囲気は掴めてきたので、ある程度慰霊巡拝団企画上のアイディアも浮かんできた。トウングーを訪れることは、次の機会に譲るとしても第1回の巡拝団ではマンダレーから往復バスを利用してでも何とかメイクテラ飛行場周辺を全体の旅程の中に組み込んでみたかった。出来れば戦友会の人たちの希望を叶えてあげて飛行機で訪問出来るようにしてあげられたらと思った。メイクテラ空軍飛行場の滑走路表面の土はコンクリートのように堅く、素人なりにビルマ国内を飛んでいるバイカウント機か、もっと小型のツインオッター機なら何とか離着陸出来るのではないかと勝手に想像してみた。

ラングーンに再び戻ると、早速老朽化したビルマ航空の本社ビルを訪ね運航局長に改めて面会を求め、TIS立会いのもとに旅程に沿った手配の依頼とともに、メイクテラ空軍飛行場へチャーター機を飛ばして欲しいと執拗にお願いしてみた。さすがに空軍管理下の空港使用の問題でもあるので運航局長から即答はもらえなかったが、好意的にも前向きに軍へ折衝することを約束してくれた。

9. 涙、涙、涙………のビルマへの帰郷

1年近い準備を重ねた末、1972年1月旧第5飛行師団隷下「飛行第64戦隊」（加藤隼戦闘隊）戦友会の有志、遺族に終戦時の隼戦闘隊長、元第5飛行師団参謀長、往時の読売新聞従軍記者を交えた錚錚たる第1回巡拝団一行は、ビルマを中心とする東南アジアの国々へ亡き戦友の慰霊の旅へ出立した。未解決の要望を抱えてはいたが、ビルマ国内を巡拝中に一片の朗報が届いた。突如ビルマ空軍司令官から TIS を通じてメイクテラ空軍飛行場へのチャーター機による飛行を特別に許可するという思いがけない知らせを受けたのだ。正に異例中の異例といってもよかった（その時の参加者の感激ぶりについては加藤隼戦闘隊史「飛行第64戦隊史・栄光の隼戦闘隊」<平成5年6月4日発行>掲載記事の巡拝団日記に同行された元戦隊長宮辺英夫氏が触れている）。

二十数年ぶりに懐かしのビルマの土を踏んだ参加者は、ラングーン空港着陸前の機上から感極まり嗚咽で言葉にならなかった。慰霊祭におけるビルマ僧の読経の間も涙が止まらず、祭文の奏上、英霊への呼びかけへ進むとすすり泣きから遂には全員が号泣する有り様で、その場に居合わせた私もついもらい泣きを抑えることが出来なかった。これほどまでに亡き戦友への想いが強かったのかと改めて感激と感動で身が震えた。慰霊祭が終わり気持ちが落ち着いた後で代表者からお陰で永年の念願が果たせたとお礼と感謝の言葉をいただいたとき、これまでの苦労は報われたと感じた。参加者からはメイクテラへの飛行は時間の節約と疲労の軽減のためにも有難かったが、かつて勤務した飛行場に再び飛来することが出来て思い出の地で思いっきり戦友のために涙を流せたことに最も感激したと口々に語り合っていた。これぞ旅行者冥利に尽きると思った。

10. ビルマ政府高官の特別の配慮

実は思いもかけなかったメイクテラ空軍飛行場へチャーター機の乗り入れが実現した背景には、下見の折りに度々ビルマ航空の本社を訪ねては多くのビルマ航空社員ととりとめもない会話を交わしている間に、ビルマ政府及びビルマ軍高官の中には日本の旧陸軍士官学校の出身者が多いという情報を小耳に挟んだことが大いに役立った。帰国直後Nさんに下見の報告と巡拝団企画の話をした序でに、ビルマ政府要人の多くが戦時中日本の陸軍士官学校へ留学した経験があるという加藤部隊にとっては耳よりな情報を伝えた。加藤部隊には名うての勇士が多数配属されていたので、当時の陸軍航空士官学校には加藤部隊出身の教官も数多く派遣されていた。特に隻脚のパイロットとして知られた檜与平氏は操縦技術、人格識見ともに卓越して広く教え子たちから敬愛され、戦時中ビルマ人留学生からも慕われていた。その教え子の中に、運良く時のビルマ政府の実力者である情報局長（後に内務大臣）ウ・チッキン大佐と空軍司令官ウ・ソーライン中佐がおられた。ビルマ入国後にNさんを通して檜氏からのメッセージを受け取った両氏が恩師と加藤部隊戦友のために可能な限りの便宜を図ってくれたことが後になって明らかになった。

メイクテラ飛行場への飛行許可の他にも、二人の高官は隼戦闘隊巡拝団に対して温か

い配慮を示してくれた。軍神加藤建夫戦隊長が散華されたベンガル湾に臨む海辺で行われた慰霊祭の間は定期便をアキャブ（現シットウェイ）空港に長らく駐機させ時間をたっぷりとってくれたり、アキャブからラングーンに帰るなり訳が分からないまま迎いのビルマ政府専用バスでビルマ政府迎賓館へ案内され、そこで大晩餐会を開催してくれ、そのニュースが翌日の新聞、ラジオでビルマ全土に大々的に報道され、鈴木大使以下日本大使館関係者らを仰天させるというおまけまでついた。

【ビルマ出国の朝お世話になったウ・チッキン情報局長にお礼を申し上げるべくNさんを含む代表者と私はビルマ政府合同庁舎を訪れ、そこでNさんが「いまの日本は恵まれ過ぎて国民はヤマトダマシイを失くしました」と言った途端、ウ・チッキン局長が「ヤマトダマシイは当分ビルマがお預かりしています」と応えられたのには全員面食らってしまった。その足で日本大使館も表敬訪問して鈴木大使にその話をしたところ大使も驚かれると同時に「う～ん」と唸って感心された。だが、後年鈴木大使が著書「ビルマという国」（1977年、国際PHP研究所発行）の中でこの含蓄ある言葉をウ・ルウイン財務副大臣（後の副首相）から聞いたと記述しているのは鈴木大使の思い違いではないだろうか？】

これが機縁となり翌年の第2回巡拝団では、ビルマ航空側も使用されていないトウングー旧飛行場の飛行実現に向けて真剣に現地調査までやってくれた。結果的には大型機種の離着陸は不可能ということが確認された。しかし、貨物列車の引込み線へ客車を留置してホテル代わりに使用するアイデアを提案してくれ、半ば諦めていたトウングー旧飛行場内での慰霊祭も実現することが出来た。

「第1回加藤隼戦闘隊ビルマ巡拝団」で巡拝団企画・実施に先鞭をつけた会社では巡拝団企画が以後、毎年のように戦友会や遺族会による巡拝団となって発展し、いまではビルマ、及び他のアジア、シベリア、太平洋諸島方面への巡拝団、或いは厚生省による戦没者遺骨収集事業として業務を委託されるに至り、今日も引き続き会社の大きなプロジェクトの柱として堅実に運営、実施されていることは、道を切り拓いた者にとって大きな誇りであり喜びでもある。

このプロジェクトの成功と基盤造りは、最初のビルマ巡拝団が基点であり、その導火線になったのは、間違いなく全くの白紙状態のまま海外武者修行的精神でビルマへ出かけ、過去の海外ひとり旅で培ったノウハウを生かし、企画の実現へ道筋をつけることが出来た下見旅行の成果であると思っている。

つづく